

【B年】聖霊降臨節第19主日(2022年10月9日)

【旧約聖書日課】創世記32章23～33節

²³その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った。²⁴皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、²⁵ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。²⁶ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。²⁷「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福して下さるまでは離しません。」²⁸「お前の名は何というのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、²⁹その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」³⁰「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言っ、ヤコブをその場で祝福した。³¹ヤコブは、「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」と言っ、その場所をベヌエル(神の顔)と名付けた。

³²ヤコブがベヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引きずっていた。³³こういうわけで、イスラエルの人々は今でも腿の関節の上にある腰の筋を食べない。かの人がヤコブの腿の関節、つまり腰の筋のところを打ったからである。

【使徒書日課】

コロサイの信徒への手紙1章21～29節

²¹あなたがたは、以前は神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました。²²しかし今や、神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し、御自身の前に聖なる者、きずのない者、とがめるところのない者としてくださいました。²³ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。この福音は、世界中至るところの人々に宣べ伝えられており、わたしパウロは、それに仕える者とされました。

²⁴今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています。²⁵神は御言葉をあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、この務めのために、わたしは教会に仕える者となりました。²⁶世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画が、今や、神の聖なる者たちに明らかにされたのです。²⁷この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたも

のであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。²⁸このキリストを、わたしたちは宣べ伝えており、すべての人がキリストに結ばれて完全な者となるように、知恵を尽くしてすべての人を諭し、教えています。²⁹このために、わたしは労苦しており、わたしの内に力強く働く、キリストの力によって闘っています。

【福音書日課】マルコによる福音書14章26～42節

²⁶一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。

²⁷イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたは皆わたしにつまずく。

『わたしは羊飼いを打つ。

すると、羊は散ってしまう』

と書いてあるからだ。²⁸しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。」²⁹するとペトロが、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と言った。³⁰イエスは言われた。「はつきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」³¹ペトロは力を込めて言い張った。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。

³²一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていないさい」と言われた。³³そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、³⁴彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」³⁵少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、³⁶こう言われた。「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」³⁷それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。³⁸誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていないさい。心は燃えても、肉体は弱い。」³⁹更に、向こうへ行っ、同じ言葉で祈られた。⁴⁰再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。⁴¹イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。⁴²立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

創世記32章23～33節

²³だが彼は夜中に起きて、二人の妻、二人の召し使いの女、それに十一人の子どもを引き連れ、ヤボクの渡しを渡って行った。²⁴ヤコブは彼らを引き連れ、川を渡らせ、自分の持ち物も一緒に運ばせたが、²⁵ヤコブは一人、後に残った。すると、ある男が夜明けまで彼と格闘した。²⁶ところが、その男は勝てないと見るや、彼の股関節に一撃を与えた。ヤコブの股関節はそのせいで、格闘をしているうちに外れてしまった。²⁷男は、「放しなさい。夜が明けてしまう」と叫んだが、ヤコブは、「いいえ、祝福してくださるまでは放しません。」と言った。²⁸男が、「あなたの名前は何と言うのか」と尋ねたので、彼が、「ヤコブです」と答えると、²⁹男は言った。「あなたの名はもはやヤコブではなく、これからはイスラエル〔「神は闘う」「神と闘う」の意〕と呼ばれる。あなたは神と闘い、人々と闘って勝ったからだ。」³⁰ヤコブが、「どうか、あなたの名前を教えてください」と尋ねると、男は、「どうして、私の名前を尋ねるのか」と言って、その場で彼を祝福した。³¹ヤコブは、「私は顔と顔とを合わせて神を見たが、命は救われた」と言って、その場所をベヌエル〔「神の顔」の意〕と名付けた。

³²ヤコブがベヌエルを立ち去るときには、日はすでに彼の上に昇っていたが、彼は腿を痛めて足を引かずっていた。³³こういうわけで、イスラエルの人々は今日に至るまで股関節の上にある腰の筋を食べない。男がヤコブの股関節、つまり腰の筋に一撃を与えたからである。

コロサイの信徒への手紙1章21～29節

²¹あなたがたも、かつては神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました。²²しかし今や、神は御子の肉の体において、その死を通してあなたがたをご自分と和解させ、聖なる、傷のない、とがめるところのない者として御前に立たせてくださいました。²³ですから、あなたがたは揺るぐことなく、しっかりと信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられており、私パウロはそれに仕える者となったのです。

²⁴今私は、あなたがたのために喜んで苦しみを受け、キリストの体である教会のために、キリストの苦難の欠けたところを、身をもって満たしています。²⁵私は、自分に与えられた神の計画に従って、教会に仕える者となりました。あなたがたに神の言葉を余すところなく伝えるためです。²⁶永遠の昔から幾世代にもわたって隠されてきた秘義〔あるいは神秘〕が、今や、神の聖なる者たち

に明らかにされたのです。²⁷神は彼らに、この秘義が異邦人の間でどれほど栄光に満ちたものであるかを知らせようとされました。この秘義とは、あなたがたの内におられるキリスト、すなわち栄光の希望です。²⁸このキリストを、私たちは宣べ伝え、知恵を尽くしてすべての人を諭し、教えています。それは、すべての人を、キリストにある完全な者として立たせるためです。²⁹このために、私は労苦し、私の内に力強く働くキリストの力によって闘っている〔別訳→競っている〕のです。

マルコによる福音書14章26～42節

²⁶一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。²⁷イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたは皆、私につまずく。」

『私は羊飼いを打つ。』

すると、羊は散らされる』

と書いてあるからだ。²⁸しかし、私は復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。」²⁹するとペトロが、「たとえ、皆がつまずいても、私はつまずきません」と言った。³⁰イエスは言われた。「よく覚えておく。今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度、私を知らないと言うだろう。」³¹ペトロは言い張った。「たとえ一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。

³²一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「私が祈っている間、ここに座っていないさい」と言われた。³³そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく苦しみ悩み始め、³⁴彼らに言われた。「私は死ぬほど苦しい〔別訳→悲しい〕。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」³⁵少し先に進んで地にひれ伏し、できることなら、この時を過ぎ去らせてくださるように祈り、³⁶こう言われた。「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯を私から取りのけてください。しかし、私の望みではなく、御心のままに。」³⁷それから、戻って御覧になると、弟子たちが眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。一時も目を覚ましていられなかったのか。³⁸誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていないさい。心ははやっても、肉体は弱い。」³⁹さらに、向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。⁴⁰再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。まぶたが重くなっていたのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。⁴¹イエスは三度目に戻って来て言われた。「まだ眠っているのか。休んでいるのか。もうよかろう。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。⁴²立て、行こう。見よ、私を裏切る者が近づいて来た。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・10月9日「聖霊降臨節第19主日」の日課主題は「苦難の共同体」。

・旧約聖書日課は、「創世記」から、ヤコブ物語に収められた「ペヌエルにおける格闘」の逸話伝承の箇所。使徒書日課は、「コロサイの信徒への手紙」から、手紙の序論部分の終わりでパウロ自身の召命について述べられている箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、「過越の食事」を終えてオリーブ山(ゲッセマネ)まで移動する途上で弟子たち全員の離反が告げられる箇所。

・10月第2主日は教団行事暦「神学校日・伝道献身者奨励日」であるが、主日聖書日課は「聖霊降臨節第19主日」の指定箇所に従う。

旧約日課(創世記 32章より)

・「創世記」は、ユダヤ正典「律法(トーラー)」の第一巻にして「聖書」全体の第一に位置する文書。正典「律法」第二巻から第四巻で展開される「モーセ物語」に対して、第一巻の「創世記」は、より古い時代の世界創生・民族草創の伝承を集成している。1~11章の「世界創生」伝承と、12~50章「族長物語」は、構成上、連続したものとして接続しているが、明確に異なる伝承群を前提としている。「族長物語」は、アブラハムから始まる四代の家族の物語として展開するが、前半(12~25章)の「アブラハム物語」と、後半(25~50章)の「ヤコブ物語」に大別され、その両者を接続する補助的物語としての「イサク物語」があり、また、「ヤコブ物語」の後半には「モーセ物語」へと接続する伏線を提供する「ヨセフ物語」が下部構成として置かれている。日課箇所は、「ヤコブ物語」中に置かれた神顕現伝承の一つで、ヨルダン川東側のギレアドの地マハナインおよびペヌエルに結びついた伝承である。この伝承中に、ヤコブに対して神が「イスラエル」の名を与えたという逸話が含まれる。

・「ヤコブ物語」前半(25~36章)は、イサクの双子の息子エサウとヤコブが相続争いによって対峙し、ヤコブが一時的に母リベカの故郷(祖父アブラハムの出身地)であるパダン・アラムの地ハランにいる叔父ラバン家に身を寄せた後、20年の時を経て帰郷し、兄エサウと再会・和解を果たす物語として構成されている。この物語の中で、ヤコブの双子の兄エサウは「エドム人」の祖とされている。「エドム人」は、アカバ湾を挟んでシナイ半島対岸のアラビア半島西端に位置し「セイルの地」「エドムの高地」と呼ばれる山岳地帯に勢力を有した部族集団連合で、王国時代に至るまでユダ・イスラエルと対立関係にあったと考えられる人々。ユダ・イスラエルの起源(の一部)も山岳地帯を拠点とする部族連合であったと考えられ、歴史的には、山岳部族の勢力争いが背景にあったと考えられる。なお、イスラエル(北の諸部族)は、平地を拠点とするカナン系部族を取り込みながら成立したと考えられている。

・「ヤコブ物語」における「神顕現伝承」は、この「ペヌエルにおける格闘」の逸話の他に、「ベテルにおける梯子の幻」の逸話がよく知られる。「ベテル」の逸話は、イスラエル史上に繰り返し聖所の一つとして登場するベテルに関する伝承であり、聖所祭司がその営みの中に組み込んで伝承してきたと推認される。一方、「ペヌエル」の逸話は、必ずしも聖所と結びついておらず、川の渡し場という危険の伴う場所に伝えられる「悪鬼伝承」のような類の伝承が転化したものとも推認されている。場面となっているヤボク川は、ギレアドの山地を二分する峡谷を流れる川で、山岳部族間の紛争地であったとも考えられる。

・この逸話には「ペヌエル」の地名譚が含まれている。ペヌエルの地は、「聖書」中で他に、「士師ギデオンの物語」の中でギデオンらによって破壊された町として(士師 8章)、また、王国時代の「ソロモン王没後の王位継承物語」の中で北王国イスラエルの王とされたネバトの子ヤロブアムが再建した町(要塞?)として「シケム」と共に(王上 12:25)、現れる。「シケム」は、ヨルダン川西側のエフライム山地中にある聖所であるが、「ヤコブ物語」中、「ペヌエル」の逸話以後に集中して現れる地名である(創 33~37章)。

使徒書日課(コロサイ 1章より)

・「コロサイの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」に収められた書簡文書の一つで、アジア属州コロサイの教会共同体に宛てられたものであるが、本書簡中には近隣ラオディキアの教会共同体との間で書簡の回覧がなされるよう促す記述があり(コロ 4:16)、必ずしもコロサイの教会を特定して著された内容ではない。つまり、パウロ自身の働きとそれによって告げられた福音の理解、また信じてキリストと結ばれた者の生き方について、一般化して教える内容となっている。

・日課箇所は、書簡の序として置かれた祈りに導かれるようにして、パウロが告げてきた「和解の福音」の教理が記され、そのために仕えるパウロ自身の自己理解を示そうと展開していく箇所である。「福音」の教理展開は、同じアジア州のエフェソの教会に宛てた書簡に相似している。

・24節「わたしは・・・キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています」は、解釈が困難な箇所として議論されてきた。これは、①端的に「キリストの苦しみが教会における救済実現のためにまだ十分でないので、それを補う働きに召されているという意味、②「キリストの苦しみ」によって新たにされ聖なるものとされているべき教会において、いまだ新生と聖化において不十分なところで「キリストの苦しみが働き、新生と聖化が進められるための器として召されているという意味、などと解釈される。パウロは、常に「《キリストの体》としてあるべき教会の理想」を掲げながら、同時に「人の集団として不完全な教会の現実」を見ており、その葛藤の中に自らの働きを位置づけている。

福音書日課(マルコ 14 章より)

・日課箇所は、主イエスの「受難物語」の中に組み込まれ、「最後の晩餐」の後、オリーブ山でなされた「ゲッセマネの祈り」の逸話に至るまでを描く箇所。「最後の晩餐」の場面とそれに続くオリーブ山(ゲッセマネ)における祈りの場面との間には、両者を結ぶ移動中の場面として描かれた、弟子たち全員の離反を主イエスが予告する逸話が置かれている。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)がほぼ同様に物語を進行させているのに対して、「ヨハネ福音書」では、弟子たち全員の離反を予告する逸話が「最後の晩餐」の食事の席における言及として置かれているのみで、いわゆる「ゲッセマネの祈り」の逸話は取り上げられていない。ただし、「ヨハネ」の場合は、オリーブ山に向かわれている途上を場面として「大祭司の祈り」(ヨハネ 17 章)が置かれており、これが「ゲッセマネの祈り」に相当するものと考えられる。

・30 節「あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないというだろう」は、多少の表現の違いがあるとしても四福音書が共通して伝えているペトロの離反に関する伝承句。おそらく、ペトロの伝えた「イエス受難物語伝承」の中に彼自身の経験した出来事の証しとして組み込まれた逸話の一つであったと考えられる。四福音書中、「ルカ」と「ヨハネ」は、これを単にペトロに関する逸話に留めて描いているが、「マタイ」と「マルコ」は他の弟子たちにまで拡大して関わる逸話としている。元来のペトロが語った「受難物語伝承」では、他の弟子たちにまで拡大して語られていたのが、ペトロの特別な立場が当然視されるようになる中で、「ルカ」や「ヨハネ」のようにペトロに特有の逸話として限定されるようになったのかもしれない。

・32 節以下の「ゲッセマネの祈り」の逸話(とそれに相応する祈りの逸話)は、主イエスの祈りを具体的に再現して伝えているという点で、「福音書」中でも特異的である。ここでは、同伴した弟子たちが居眠りをしていたにもかかわらず主イエスの祈りを具体的に目撃し記憶していたこととされており、多少無理な設定となっている。しかし、旧約における神顕現伝承がしばしば「眠り」や「夢」、また「夜」などと結びつけて描かれていることを踏まえると、彼ら弟子たちは、「眠り」の中でこそ「神(の子)」としてのイエスに出会っていた、ということを示唆しているのかもしれない。イエスの祈りは、神と弟子たちを出会わせるためのとりなしなのである。

来週の誕生日 (10月9日～15日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-11 番「感謝に満ちて」(= I -2「いざやともに」)は、17 世紀ドイツの歌手で牧師のマルティン・リンカルトの作詞作曲。1630 年ごろ自らの子らのために食卓の感謝の歌として作ったが、著名な讃美歌作家クリューガーに見いだされて讃美歌集「歌による敬虔

の訓練」(1647 年発行)に収録され有名になった。バッハやメンデルスゾーンが自由用いている。

- ・21-451 番「くすしきみ恵み」(= II 167「われをもすくいし」)は、ゴスペルソング「アメージング・グレース」で知られる讃美歌で、作詞は、奴隷船船員として働いていた際に遭遇した暴風雨の中で回心し英国教会の司祭となったジョン・ニュートン。ウェスレー兄弟に続く世代で、彼らの影響を受けて伝道者になったと言われている。曲は、19 世紀初頭から米国南部で歌われていた民謡が原曲。
- ・21-430 番「とびらの外に」(= I 240「とぎせる門を」)は、19 世紀英国の著名な讃美歌作家ウィリアム・W. ハウが黙示録 3:20 に基づいて作詞。『讃美歌 21』では全面的に改訳されている。

21-11「感謝にみちて」**Nun danket alle Gott**

1. Nun danket alle Gott, / Mit Herzen, Mund und Händen, / Der große Dinge thut / An uns und allen Enden, / Der uns vom Mutterleib / Und Kindesbeinen an / Unzählig viel zu gut, / Und noch jetzt und gethan.
2. Der ewig reiche Gott / Woll' uns bei unserm Leben, / Ein immer fröhlich's Herz / Und edlen Frieden geben, / Und uns in seiner Gnad' / Erhalten fort und fort, / Und uns aus aller Noth / Erlösen hier und dort.
3. Lob, Ehr' und Preis sei Gott / Dem Vater und dem Sohne, / Und dem, der beiden gleich / Im hohen Himmelsthronen, / Dem dreieinigen Gott, / Als es im Anfang war, / Und ist und bleiben wird / Jetzt und immerdar.

21-451「くすしきみ恵み」= II-167**Amazing Grace! How Sweet the Sound**

1. Amazing grace--how sweet the sound-- / That saved a wretch like me! / I once was lost but now am found, / Was blind, but now I see!
2. The Lord has promised good to me, / His Word my hope secures; / He will my shield and portion be / As long as life endures.
3. Through many dangers, toils and snares, / I have already come; / His grace has brought me safe thus far, / His grace will lead me home.
4. Yes, when this flesh and heart shall fail / And mortal life shall cease, / Amazing grace shall then prevail / In heaven's joy and peace.
5. When we've been there ten thousand years, / Bright shining as the sun, / We've no less days to sing God's praise / Than when we'd first begun.

21-430「とびらの外に」**O Jesus, Thou art standing**

1. O Jesus, thou art standing / outside the fast-closed door, / in lowly patience waiting / to pass the threshold o'er: / shame on us, Christian brothers, / his name and sign who bear, / O shame, thrice shame upon us, / to keep him standing there!
2. O Jesus, thou art knocking; / and lo, that hand is scarred, / and thorns thy brow encircle, / and tears thy face have marred: / O love that passeth knowledge, / so patiently to wait! / O sin that hath no equal, / so fast to bar the gate!
3. O Jesus, thou art pleading / in accents meek and low, / "I died for you, my children, / and will ye treat me so?" / O Lord, with shame and sorrow / we open now the door; / dear Savior, enter, enter, / and leave us nevermore.